
わたしのパパは殺人鬼さん

おけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしのパパは殺人鬼さん

【Nコード】

N3737BA

【作者名】

おけ

【あらすじ】

わたしにはパパがない。ママはわたしが嫌いだ。顔しか知らないパパのことを想いながら、ママの顔をうかがいながら、わたしは小さな幸せを集めて平凡に生きていくのだと思っていた。——とある事件が、身にふりかかってくるまでは。 ■現代より少し未来の歪な日本を舞台にした、とある女子高校生の物語です。カテゴリに迷ってホラーに入れましたが微妙です。むしろ伝奇に近いかと。それでも都市伝説的、ホラー的な要素もあるので、苦手な方はお気を付けください。

プロローグ（前書き）

新連載を始めました。カテゴリがホラーでいいのか微妙です……。ストックがあるのでさくさく更新できると思います。よろしければお付き合いください。

プロローグ

わたしは、自己紹介が苦手だ。

そう告げると、知り合いはたいてい「ああ」という顔をする。その「ああ」には納得や、ときには同情の色が含まれている。わざわざ言葉にだして、「仕方がないよ」と慰めてくれるひともある。

わたしは、自己紹介が苦手だ。

わたしが名乗ると、初対面の相手はたいてい「えっ」という顔をする。その「えっ」には驚きや、困惑の色が含まれている。次にそのひとはだいたい、わたしの全身を確かめるようにまじまじと眺めてくる。わたしは身じろぎひとつしないように息を殺して、心無しにしてその視線をやりすこす。そして検分が終わると、ひとによっては最後に、愛想笑いに似た曖昧な表情を浮かべながら、「ごめん、もう一回教えてくれる？」と言ってくることもある。私はとても居心地の悪い思いをしながら、ふたたび自分の名前を口にする。

わたしが大嫌いな、それでもとても大切な、わたしの名前。

「姉さんはあとき、完全にキレちゃったのよ」

そう教えてくれたのは、美代さんだった。美代さんはママの妹で、母ひとり子ひとりのわたしのうちを心配して、たびたび遊びにきてくれるひとだ。仕事は宝飾関係だと言っていたけれど、具体的にどんなことをしているのかは、わたしにはわからない。美代さんはいつも明るい色のおしゃれなスーツを身にまとい、髪型もお化粧も爪の先まで、いつでもビシッと隙ひとつなく整えている。そうしてまた、おしゃべり好きで明るい美代さんは、わたしがとても小さかった頃から、ママがわたしに教えてくれないことを——ママはいつだってわたしになにひとつ教えてはくれないけれど——隠すことなく、いいことだって悪いことだってなんでもあけすけに、教えてくれた。

美代さんいわく、わたしのパパは、わたしが生まれる直前になっ

て、前触れもなく、ことわりもなく、突然行方をくらましてしまっ
たらしい。

「大がつくほど生真面目で、誠実で、優しくておおらかで、なにひ
とつ悪いところなんてないようなひとだったんだけどねえ」美代さ
んはわたしのパパについて、そんなふうに言った。「まさかそんな
ことするようなひとだとは考えてもいなかったのに、身重の妻をお
いて、予告ゼロ、連絡ゼロでドロンでしょう。おかげで姉さんは思
いっきり怒り狂っちゃったのよね。それで、その大っ嫌いな男の血
を引く娘に、憎くて憎くてたまらない男の名前を——」「美代！」
テレビのほうを向いたまま、ママがピシヤリと言った。美代さん
とわたしは、雷に打たれたように肩をすくめた。ママが激しい口調
で美代さんのおしゃべりをさえぎるのは、これまでの例から考える
と、美代さんがなにか本当のことを言い過ぎてしまったときだ。わ
たしはそんなふうに見当をつけていた。そうしてそれっきり、美代
さんとわたしの会話はおしまいになった。

それでも、わたしは考える。ママが激しく憎んでいるというパパ。
それでも、生真面目で誠実で優しくておおらかだったというパパ。
なにひとつ悪いところなんてないようなひとだったというパパ。そ
れなら、パパがママとわたしを置いていなくなってしまったのには、
なにか仕方がない理由があつたんじゃないの？ その理由はパパに
はどうしようもなくて、なにも告げられないまま姿を消さざるをえ
なかつたんじゃないの？

そうして、わたしは夢想する。もしもパパがいたのなら、わたし
の生活はどんなふうになっていただろう。今とは違って、ママとも
普通に話すことができたのかな。うちの中が沈黙と緊張でギスギス
するようなこともなかつたんじゃないかな。わたしはうちでひとり
ぼっちで留守番するようなこともなくて、パパにもママにもたくさ
ん甘えて、絵に描いたように幸せな家庭になれたんじゃないのかな。

——だから、わたしが大嫌いで、それでも大切なわたしの名前。

誠泉女学院高等科1年C組16番、菱川清治郎。

それが、わたしだ。

ブローグ（後書き）

誤字脱字ほか、ご指摘ありましたらお願いします。

第1話 わたしの朝

にぎやかな笑い声で目が覚めた。ああ、美代さんが来てるんだ。わたしはすぐにそう思った。美代さんはママが作る朝ご飯を目当てに、たびたび朝からうちにやってくる。そして、美代さん以外にこの家の中で声をあげて笑うひとはいない。

役目を果たせなかった目覚まし時計のスイッチを切って、わたしはいつも寝るときに目覚まし時計の隣へと並べて置いているカルケーに手を伸ばした。朝一番にカルケーのネットニュースに目を通すのが、わたしの日課だ。代議士の汚職事件。某党の贈収賄の話題。芸能人の結婚。昨日の野球の結果。3年前の強盗事件の裁判。ずらりと並んだニュースボックスを見るともなしに眺めながらするとスクロールして、わたしはようやく一番見たかったタイトルに辿りついた。人口管理委員会の発表。昨日足立区での違反者は五人。アベタケシ、エンドウマリコ、サカシタトモヒロ、ニイミタイチ、ヤグチミサエ。そして今日の巡回エリアは——あつ、調布市だ。……えっ、本当に？ 嫌だな、早く帰らなきゃ。

もそもそとベッドから這い出して、わたしはパジャマを脱ぎ捨てた。肌色のブラジャーをつけて白いキャミソールを着てから、襟の部分がふわりと膨らんだ制服のシャツに袖を通す。スカートは膝下10センチ。わたしが通う学校には、わざわざスカートの丈を短くしたり、制服を改造したりしようとするような生徒は、ほとんどいない。

それからわたしは、学習机の上に置いておいた、銀色のペンダントを手にとった。中に写真を入れられるペンダントは——ロケットつっの？ んなモンいまどきどこにもありやしねえよ。そんな親友の呆れたような意見を無視してあちこち探しまわった結果、寂れた商店街にひっそりたたずむ朽ちかけたようなアンティークショップで、ようやく手に入れたものだ。複雑な模様が彫り込まれた銀色

の蓋を開けると、そこには笑顔の男性がいた。まだ若い青年は、真面目そう、誠実そう、優しくておおらかそうな顔立ちで、歯を見せて心から楽しそうに笑っている。これが、パパ。わたしのパパだ。わたしが物心ついたころには、ママはパパに関するものをすべて処分してしまっていた。けれどこの写真だけは美代さんのところに残っていたのだ。仲間うちで旅行に行ったときに撮った集合写真なのよ、と教えてくれたながら、美代さんはこの写真をわたしにくれた。ママには内緒で。わたしはその集合写真の中から、美代さんがこれがパパだと教えてくれたひとの顔の部分をまるく切り取って、ペンダントに納めた。まるであつらえたように、切り抜いた写真はペンダントにぴったりと収まった。

パパは今日も、ペンダントの中で笑っている。

「おはよう、パパ。今日もわたしを守ってね」

この頃はまだ二十代だったというパパに向かってつぶやいてから、わたしはペンダントの蓋を閉めた。これもわたしの朝の日課のひとつだ。

わたしの通う学校では、指輪やピアスなどの装飾品のたぐいは禁止されている。けれど、中等科二年の服装検査で注意されて生徒指導室に呼ばれた際、「これは、昔行方不明になった父の写真で、お守りなんです」と正直に告げたら、先生はすごく困った顔をして、腕組みをしてしばらく考えて、うぐん低く唸ったあとに、「絶対に服の上にはつけるなよ」と言うだけで、あとは見なかったことにしてくれた。——はい、先生。他の生徒に見せてしまうようなことは絶対にしません。わたしはペンダントを首にかけると、細い鎖をそっとシャツの下にもぐりこませた。

第2話 わたしの家族（前書き）

区切りがいいところまで、と思ったらちよつと長くなりました。
これくらいの長さが基本になるかもしれせん。

第2話 わたしの家族

わたしの家はマンションの7階にある。わたしの部屋のドアを開ければすぐそこがリビングだ。部屋を出て左に曲がればキッチンがある。それからリビングとキッチンの中間くらいのところにもうひとつドアがあつて——つまりはわたしの部屋の隣にもうひとつ部屋あつて、そこをママが使っている。ちなみにわたしはママの部屋に入つたことも、中をのぞいたこともない。そしてわたしの部屋からみてリビングのむこう正面のところに、玄関がある。

最低限の支度をととのえてわたしが部屋を出ると、予想通り、すぐに明るい声がとんできた。

「あら、ずいぶん早いわね。おはよう、セイちゃん！」

リビングのソファに腰掛けた美代さんは、横から見ても今日も完璧だった。薄いピンク色のスーツ姿は美代さんの大柄で女性らしい身体にぴったりフィットして、凹凸がはっきりした体型を強調している。光の当たり方によつてはブロンズ色にも見える茶色の長い髪は、灯りの少ない明け方のリビングでも、ツヤツヤと光つてゆるやかに巻きながら豊満な胸へと流れ落ちていた。日本人ばなれした彫りの深い顔は、マスカラもアイメイクもチークも口紅もグロスもバツチリで、わたしはどうすれば美代さんみたいな大人の女性になれるんだろうと、いつも思うことを考えた。わたしはこれまで美代さんがだらしない格好をしているところや、メイクが崩れたりしたところなどを、いちども見たことがない。

そんな美代さんの向こう、並んでソファに腰をおろしたママは、美代さんとはちつとも似たところがなかった。身体はどこもかしこもぺったんこで小柄。そのうえ顔立ちは、丸い顔に丸っこいパーツが配置された、どちらかといえば童顔だ。そんなママに、わたしはそっくりだとよく言われる。おまけに、これからお仕事で完璧に身なりを整えた美代さんと正反対に、これから寝るだけのママは、今

日もノーメイクで頭はぼさぼさ、ねまき姿のまま彫像のようにテレビを見ていた。

「おはよう、美代さん。……ママも、おはよう」

美代さんに挨拶をかえしてから、わたしはママに声をかけてみた。しかし、ママはテレビから目を離すことも、返事をしてくれることもなかった。——いつものことだ。だから、大丈夫。わたしは自分にそう言い聞かせながら、シャツごしにペンダントをぎゅっと握った。「憎くてたまらない男の血を引いていて、おまけにそのまんま名前をつけた子どもを、可愛がれると思う？」そんな美代さんの声が脳裏によみがえる。うん、わかつてる。わかつてるよ美代さん。だからわたしは、ママに期待はしない。

ママは、夜のお仕事をしているらしい。どんなことをしているのかという具体的なことを——小さなお店で男のひとにお酒を出して一緒に喋ったりしているのだということを教えてくれたのは美代さんだったけれど、その時わたしは「あんなに無愛想なママが男のひととお喋りできるの!？」とはびっくりしたのだけれど、それでもママがそんな感じの夜のお仕事をしているのだろうことは、幼い頃からわたしも薄々感じ取っていた。下校がまだ陽が落ちる前だった小学校の頃、わたしは学校から帰るたびに、入れ違いに出かけていくママの後ろ姿をいつも見ていた。中学にあがって帰る時間がすこし遅くなると、わたしは誰もいないまっくらな家に帰る、完全な鍵っ子になった。

そんなママが、夜の何時くらいに帰っているのかは、すつか眠ってしまっているわたしにはわからない。けれど、そんな夜のお仕事をしているママが、いつもすぐくすぐく眠そうな顔をしながらも朝から起きだして——もしかしたらは寝ていないのかもしれないけれど、一心不乱にテレビの情報番組を見ているのは、ワイドショーが好きだから、ではない。ママが見ているのは、テレビの右上に表示されている占いなのだ。

「姉さんは占い狂なのよ」

そんな言葉を美代さんから聞いたのはいつのことだろう。そのときその場にママはいなかった。それくらいのことしか思い出せないくらい、前のことだ。

「こればかりは、趣味ってところの話じゃないわね。信者よ信者。昔っからそうなのよ。雑誌とかに、占いのページってあるじゃない？　子どもの頃からああいうのも本当に真剣に読んでたし、中学にあがってお小遣いをもらうようになったら、週一ペースでいろんな占い師のところに通ってたわ。今じゃひとりの占い師に絞ってるみたいだけど——知ってた？　その占い師と姉さんの付き合いつて、セイちゃんが生まれる前からなのよ」

……だったら、その占い師さんに頼んで、わたしの名前を決めてもらえばよかったのに。美代さんの言葉を聞いて、ママがいないのをいいことに、まず真っ先に、そうつぶやいたことを覚えている。たしかあの時、美代さんは大笑いしたんだった。

わたしはリビングを横切ると、髪をまとめて洗面所で顔を洗ってから、キッチンのわたしの席についた。

こんがり焼けたトースト。表面はふんわり、内側はトロトロのオムレツの中に、今日入っているのはなんだろう。ベーコンだったら大当たり、チーズなら当たり、ハウレンソウなら外れだ。オムレツにフォークを入れるとき、わたしはいつも少しだけワクワクする。あとは、手作りドレッシングがかかった温野菜のサラダと、根菜中心のスープ。それから熱々のコーヒー。これがわたしのいつもの朝の食卓だ。

わたしは幼い頃にいちど、美代さんに聞いてみたことがある。「どうしてママはわたしのことが嫌いなのに、いつもご飯を作ってくれるの？」そのとき美代さんは、ピンク色に輝く唇を皮肉にゆがめて笑った。それはいつもの美代さんではないような、ちよつと意地が悪い笑いかただった。ゆがんだままの唇が動いた。「それはね、姉さんが占い狂信者だからよ」

その頃にはわたしもママの占い信奉を理解し始めていたので、い

つたいその占い師とママはどんな会話をしたんだろう、と不思議に思った。「占い師様占い師様、わたしはどんな母親であるべきなのでしょううか?」「お待ちください……おお、出ました! 母親たるもの、子には手作りの食事を採らせなければなりません!」だなんて会話が あったのかな。そう思ってから、すぐに自分の想像のおかしさに笑ってしまったものだった。

「いただきます」

手をあわせて、わたしはママが作ってくれたご飯をたいらげた。いつもと変わらないメニュー。いつもと同じ味に、わたしはほっとする。ちなみに今日のオムライスは当たりだった。最後に食後のコーヒーをゆつくりと味わってから、わたしはちよつとだけ浮かれた気分で席を立った。

わたしは、自分で食器を洗わない。それどころか、お皿を流しに運ぶことすらしない。それは我が家の決まりごとのひとつだ。

そう、あれはわたしが小学生の頃のこと。調理実習のあとにみんなでお皿洗いをし、そのとき先生がこう言ったのだ。「おうちでも、こうやってお手伝いをして、お母さんを助けてあげましょうね」

だからその晩わたしは、ママが作って置いていつてくれた夕ご飯を食べたあと、初めて流し台に食器を運んで、そしてつたない手つきで洗った。ママは驚いてくれるかな。わたしのこと、いい子だと思ってくれるかな。そんな期待に胸を膨らませながら眠りについた翌朝、部屋を出た途端に、テレビを見ていたママが珍しくわたしを振り返った。もしかしたら、褒めてもらえるかもしれない。——そんな期待を、ばっさりと断ち切るような形相で。

「あなた、勝手に食器に触るんじゃないよ。割ったりしたらどうする気だい」

そのママの表情を見て、そしてその低い低い怒りのこもった口調を聞いて、わたしはそれから、食後にお皿に触ることをやめた。

「ごちそうさま」

相変わらず彫像のようにじっと動かずテレビの右上を凝視し続け

るママと、まったく反応のないママを気にもせず話し相手にして、絶え間なくおしゃべりをしては笑い転げる美代さんの脇を横切って、わたしは部屋に戻った。鏡を見ながら、ふんわりとスカーフを縛って、ブレザーをはおる。形が崩れてしまったスカーフをちょいちょいと直す。それから、縛りっぱなしにしていた髪の毛をほどいて櫛で軽く梳き、鞆にカルケーを入れて、わたしはふたたび部屋を出た。ソファの後ろを通って、玄関に向かう。

「いつてきます」

「あら、もう行っちゃうの？　ちょっと早すぎない？」

美代さんが、バサバサと音が鳴りそうなほど長いまつげをしばたたかせる。たしかに、今日は起きたのがとっても早かったから、本当はまだ時間に余裕はある。正直なところ、ありすぎるほど、あるしかし、だからといってわたしはこのうちで――ママのいるこの場所、パパの写真を隠し持っているのが、なんとなくいたたまれなかった。

「うん、たまには早く行ってみるのもいいかなと思って」

「そう。セイちゃん、カルケーは持った？」

「持つてるよ、大丈夫。それじゃ、いつてきます」

最後までこちらを見てくれなかったかたくななママの横顔をいちどだけ見ながら、美代さんに手を振って、わたしは家を出た。

第3話 わたしの幼馴染み

マンション出口の駐輪場で、わたしはぼったりコウキ君に会った。

「あ……おはよう」

「あれ、おはよう。今日はずいぶん早いんだな、セイ。ちょっと待っててくれるか、チャリ出すから」

そう言っただけで笑うと、コウキ君はぎゅっと締め込まれた駐輪場の中で、黒い自転車の鍵をガチャガチャといじりはじめた。その背中を見るわたしを、戸惑いの渦中に残したまま。

コウキ君とわたしは、同じマンションの同じ階、それも近くに住んでいる。どうやらママ同士になにか交流があったらしく、幼い頃わたしとコウキ君はいつも一緒に遊んでいた。ときにはコウキ君の家で、ときにはわたしの家で、ときにはマンションのすぐ前にある公園で。広いマンションの建物も、わたしたちにとっては巨大なアスレチックだった。マンション屋上庭園の花がいつ咲くのかも、葉っぱについた虫の名前も、非常階段の滑り降りかたも、公園の木の登りかたも、鳥の巣がある場所も、さかあがりのしかたも、ひらがなもかたかなも、わたしは全部コウキ君に教えてもらった。コウキ君はわたしより一歳年上で、身体も大きくて、あの頃のわたしにとってはいくぐい引張ってしてくれる兄のような存在だった。それと同時にコウキ君は、なんでも知っているヒーローだった。

けれど、彼が小学校高学年になった頃だろうか。前触れもなく、突然コウキ君はわたしから距離をとりはじめた。遊びに誘っても、今までのように一緒に笑ってくれない。お話をしようとしても、つまらなさそうにぶいと横を向いてしまう。どうして、と泣きながら尋ねたわたしに、コウキ君は「女はすぐ泣くから嫌なんだよ」と突き放すような声で言った。それから「いつまでも女とばっか遊んでらんねえよ」と言い放って、同じクラスなのだろう男の子たちと一緒に駆けていってしまった。その日の夜、わたしは一晩中、布団

にもぐって泣いた。わたしにだって学校の友達はいた。それでも、わたしにとってコウキ君は、わたしの小さな世界で、パパを除くと一番目に、大切なひとだったのだ。どうしたらいいのだろう。どうすれば、コウキ君はもとのコウキ君にもどってくれるんだろう。泣きじゃくりながら必死に考えたけれど、答えは出なかった。

一年早くコウキ君が中学生になると、コウキ君はわたしたちの距離をいっそう広げていった。コウキ君はわたしのことを「菱川」と呼ぶようになり、わたしにも彼を「和久井君」と呼ぶように強要した。あの、優しく「セイちゃん」と呼んでくれたコウキ君が懐かしくて、その日もわたしは布団にもぐって一晩中泣いた。

それからはもう、わたしはコウキ君にどう接すればいいのかわからなくなっていた。わたしが誠泉女学院に入学したことで、中学校も離れてしまい、接点もすっかり減った。マンション内できどき会つうことはあつても、目があえば逸らされる。勇気を振り絞って話しかけても、「ああ」「いや」「別に」などというぶっきらぼうな返事しかかえしてくれない。わたしが近こうとすると、そのぶん離れられる。そんな中学の3年間を過ごすうちに、わたしの心はひび割れていき、そうしてわたしはこう思うようになった——コウキ君はもう、死んでしまったのだ、と。今考えれば、そうとも思わなければ、耐えられなかったのかもしれない。その頃にはわたしにも、ほかに大切なひとが何人かでき始めていた。けれど、それでも数少ない、大切な大切なひとのうちのひとりを、喪失してしまっただから。

状況が一変したのは、わたしが高等科にあがった頃だった。コウキ君のわたしへの態度が、あからさまにやわらかくなったのだ。会話をするときにはきちんと目が合う。その会話だって、以前のように二言三言では終わらない。冗談を言って笑ったりもする。そうするうちにコウキ君は、昔のことを忘れたかのように、わたしのことを「セイ」と呼ぶようになった。それも、以前のような親しみを込めて。さらには、顔をあわせるたびに、他愛ないことでも必ず話し

かけてくれるようになった。

死んでしまったコウキ君。やんちゃで、物知りで、いたずらっ子で、腕白だった、わたしの大切な兄。わたしのヒーロー。

そのコウキ君と、身長もうんと伸びて、声もずいぶん低くなって、落ち着いた笑顔を浮かべて、すっかり大人っぽく――まるで男のひとようになつてしまったコウキ君を、わたしにはなかなか結びつけることができなかった。それに、今のコウキ君は、格好よくて、背も高くて、部活の剣道でもいい成績を残していて、人望もあつて、自他校問わずに人気者なのだと思ふに聞いたことがある。

――どうして、また仲良くしてくれるの？

思い切つてそう聞いてみたいけれど、まるで知らないひとのようなコウキ君に、そんな踏み込んだことを尋ねるのは気がひけた。そのまま結局、わたしは今になつても聞くことはできていない。

「そりやお前、誠女のオンナが彼女だったらハクがつくと思つてんだよ、バカなオスどもは」

学校でぼろりとこぼしたその疑問に、そんな答えを返してきたのは、わたしの親友、篠塚だった。篠塚は、「校則では問題ないですよね」とうそぶいて、頭を丸刈りにし、スカートのかわりに自転車通学の子が使うストラップスをはいて、まるで男の子のような言葉遣いをする同級生だ。周囲の生徒たちの評価は、変わり者が3割、格好いいが7割、といったところらしい。その評価は、どんな先生に対しても物怖じせずにつけつけと意見するところも理由だと思ふ。けれど、それよりも篠塚の外見が一番の原因なのだろう。篠塚の小さな顔には、スツと目尻の切れあがつた瞳と、高く通った鼻筋、なにも塗っているわけでもないのにツヤツヤ赤く輝くぼつてりとした唇。それらがバランスよく配置されていて、美形という言葉をも人間に形にしたのならこうなるんだろうな、と思わせるほど、完璧な美形なのだ。

ちなみに、そんな彼女とわたしが友達になつたのは、誠泉女学院中等科の入学式の日のことだった。中等科に入学して一番最初のホ

ームルームが終わり、あとはもう帰るだけというところで、いったいこの美少年かと目を疑うような彼女がまだ席に座っていたわたしのところにズンズンやってきて、言ったのだ。

『なあ、いいなあお前の名前。俺のと交換してくんねえ？』

わたしはまず、彼女のあまりの美しさにびっくりして、何度もまばたきをして彼女を見直した。次に、ズボンをはいているってことは男の子なのかな、とぼんやり思っ、そんなわけないじゃない、と否定した。それから、言われた内容をよく考えて、彼女を見上げて答えた。

『わたし、自分の名前は嫌いだけど、これは大切な名前でもあるから、あげられないよ』

美少年のようにみえてももちろん違う美少女は、一瞬目を丸くしたあと、なにがおかしかったのか、ゲラゲラ笑ってわたしの肩を叩いてきた。あの日から、篠塚との付き合いは、もう4年目に突入している。

『ハクがつくって、どういうこと？』

わたしはいちど授業で見た、ぺらぺらで破けやすい金箔を思い浮かべながら尋ねた。わたしがこの学校を選んだのは、小学校6年生のときに、珍しくママに命令されたからだ。わたしは、中学受験は面倒だけれど、家が近いからいいな、と思っ、うなずいた。そんなママだって「家から近いしエスカレーター式なんだから、呼び出されたり面倒が少なくていいだろ」と言っていたと、美代さんから聞いた。だからわたしは中等科からこの誠泉女学院に通うことになったのだ。でも、ハクってなに。やっぱりぺらぺらの金箔が、わたしの脳裏にひるがえる。篠塚はニヤリと笑うと、首を横に振ってみせた。『ま、お前はそれでいいんだろ？』

「——よつと。待たせたな。行こうか」

わたしが昔のことを思い出しているうちに、ぎゅうぎゅう詰まった自転車置き場からようやく自分の自転車を引っ張りだしたらいたコウキ君が、ハンドルを握りながら声をかけてきた。わたしはこく

んとうなずいて、わたしたちは一緒に歩き出した。死んだはずのコウキ君と、目の前にいるコウキ君。まるで大人の男のひとのようなコウキ君。わたしはまたその混乱に竜巻のようにさらわれかけて、とりあえず頭に浮かんだことを口にした。

「自転車通学、大変だね。二高だよな？」

「まあ、そっちの徒歩10分と比べればな。それに、あの学校前のキッツいのぼり坂がなあ……でもまあ、さすがに1年通えば慣れてもくるよ。それより、セイのほうはどうだ？ 高校生になってそろそろ2ヶ月だろ？」

「なんにも変わらないよ。エスカレーターで4年目だもん、校舎が変わったくらいだよ。コウキ君は、いつもこんな早く学校に行ってるの？」

「部活の朝練があるんだよ。そうだ、そのうち試合でも見に来てくれよ。敵になつても幼なじみ特権つてことで応援してくれ——」つて、そもそも誠女となんてあたるはずないか、バカか俺」

「うん……試合の日、教えてね」

そんなことを話していると、マンションからひとつ目の交差点についた。コウキ君とはここでお別れだ。ほっとするような、少し寂しいような、なぜか複雑な気持ちになる。

「なあ、セイ——」

ふいに、コウキ君が声をひそめた。つられてわたしは伸び上がるようにして、背の高いコウキ君に身を寄せた。コウキ君のささやき声が、わたしの耳元のまっすぐな髪の毛をふわふわと揺らす。

「今日、調布だつてな」

コウキ君がなにを言っているのかはすぐにわかった。

「うん、調布だつて。気をつけてね」

「そういうセイこそ気をつけろよ、ぼーっとしてるんだから」

「ぼーっとなんてしてないよ。それに、コウキ君は部活とかしてるし……！」

聞き分けのない子どものように言いつのると、とつぜんコウキ君

にぐしゃりと頭を撫でられた。小さい頃のコウキ君にはよくやられた仕事だけれど、大きくなってからはまったくされたことがない。わたしは耳まで真っ赤になって、その場をとびのいた。

「コウキ君！」

コウキ君が声をあげて笑う。そして「心配してくれてありがとう」と言っと、自転車にまたがって、ぐい、と力強くペダルをこぎだした。黒い自転車に乗った背中がみるみる遠くなっていく。わたしはくるりときびすをかえして、通学路を歩きだした。

第4話 わたしの親友

わたしが通う誠泉女学院は、中等科と高等科、そして大学の3つにわかれたエスカレーター式の学校だ。中等科と高等科は生け垣ごとに隣接していて、その生け垣の一部に渡り廊下があつて、行き来は容易。だからといって、中等科の生徒が高等科に行ったり、その反対をしたりするようなことは、めったにない。中等科と高等科をぐるりと囲むように背の高い生け垣があり、さらにその外には鉄格子状の塀がそびえたっている。大学だけは少し離れた場所にあつて、わたしは今のところは行つたことがない。けれど、3年後には通うようになっていくのだらうと自然に思う。誠泉女学院は名前の通り、中等科の一年から大学の4年まで合計10年間、すべて女の子だけが通う学校なのだ。

マンションから歩いて約10分。コウキ君と別れた交差点から平坦な道をとことこ進むと、そこに高等科の門が見えてきた。中等科と高等科は隣接しているとはいっても、さっき言つたように生け垣で仕切られている。だから当然、門は別々に存在する。わたしは守衛さんにぺこりと頭をさげて、高等科の門をくぐつた。生徒の顔と名前を全部覚えていくという噂の守衛さんは、「今日はまたえらく早いね」ときさくに声をかけてきてくれた。「早起きしすぎちゃつたんです」とわたしは笑つて答えた。守衛さんが言つたとおり、時間は本当にまだずいぶん早い。朝の部活が始まるよりも前だ。だからだろう、ほかに登校している生徒はほとんど見あたらなかった。

わたしはすこしだけ、寝汚いところがある。だから、早朝の空気がこんなに素敵なものだなんて、いままでちつとも知らなかった。春の朝の風は涼やかで、思い切り肺の中に吸い込むと、頭がシャッキリしてとても気持ちがいい。朝露を弾いたみずみずしい新緑が、のぼる朝日を浴びてどこもかしこもキラキラと輝いていた。こんなに気持ちがいいのなら、これからはいつもこれくらいの時間に登校

しようかな。でも、起きられるかな。そんなことを考えながら、わたしは昇降口で靴を履きかえた。それから、よし、と気合いを入れる。1年生の教室は、校舎の最上階、4階にある。2年生の教室が3階で、3年生の教室は2階。そして1階に、職員室などがある。けれど正直なところ、わたしは運動は得意ではないし、好きでもない。そして、体力にはものすごく自信がない。「お前は年寄りか」と親友に呆れられるくらい、少しの運動でゼエゼエいつてしまう。よし、ともういちど気合いを入れて、わたしは毎朝登校するたびに永遠に続く罰ゲームのようだと思う階段を、いつものように、これもあと1年の辛抱だと自分に言い聞かせながら、ゆっくりゆっくりのぼりはじめた。

4階にたどりつく頃には案の定、軽く呼吸があがっていた。その場に座り込んでしまいたい衝動をいつものようにやりすごしながら、廊下の壁によりかかって、わたしはしばらく休憩した。ちなみにわたしは別に身体が弱いわけでもないし、むしろ大きな病気はなにもかつたことがないくらい健康優良児だ。それなのに、この体力のなさなんなんだろう。いつものことだけれど、少しだけ自分が情けなくなる。ドクドクと大きく脈打っていた心臓が次第に落ち着いてくるのを確かめると、わたしはようやく廊下を歩きだした。目指すは1年C組。この時間なら、きっとわたしが一番乗りだ。そんなことを思っちょつと誇らしくなりながら、わたしは勢いよくドアをあけた。

朝の光が金色にさしこむ、がらんとした教室。そこに、金色の輪郭をまとったひとりの少女が立っていた。

「よう、菱川じゃねえか。今日はまたずいぶん早いな」

わたしが一番乗りの期待を裏切った少女。髪の毛は丸坊主。スカートのかわりにスラックス。ひとつひとつ整った目鼻が完璧に配置された、美少年然としたその少女は、すらりと細い身体を教壇にもたれかからせて、気安くわたしに声をかけてきた。

「おはよう、篠塚。そっちこそ、早いね」

変わり者の篠塚。美しい篠塚。わたしの親友。学内の評価は変わり者が3割、格好いいが7割だと言ったけれど、篠塚は本当に学内では有名人で、そして人気があった。たとえば、中等科生は篠塚のことを「お姉さま」もしくは「お兄さま」と呼んで、隠し撮り写真が飛ぶように売れている、とか。高等科でも、まことしやかに「誠女の王子様」と呼ばれていて、やっぱり写真が飛ぶように売れている、とか。篠塚に話しかけてもらうためだけに、篠塚の前でノートやハンカチなどを落としてみたり、気分が悪いふりをしてふらりと倒れてみたりするひとがいる、だとか。そんな噂はいくらでも聞いたことがある。

ついでに言えば、これほど完璧な容姿をしていて、おまけに皮肉っぽくクールな言動の篠塚には、どこか近寄りがたいのだろう。わたしは篠塚あての連絡事項の伝言を、同じクラスの子たちから、何度となく頼まれたことがある。かと思えば、その子たちだって遠巻きになら篠塚をうつとりと眺めているのだから、不思議なものだ。そのうえわたしは上級生から同級生まで、篠塚あての手紙——ラブレターらしきもの——のお運び役を頼まれたことも、何度もあった。おまけに驚いたことに、うちの学校にはひっそりと、篠塚親衛隊なんてものまで実在していた。これは荒唐無稽な噂話ではない。大真面目に、本当に、あるのだ。——ちなみにわたしがその存在を知っているのは、いつも篠塚の隣にいるのが気に食わないからという理由で、中等科1年のときに親衛隊のひとたちに呼び出されたことがあるからだ。そのときは、上級生を中心にぐるりと取り囲まれているわたしと言われているところに、誰かのご注進があったらしい篠塚がすっとんできて、「俺のダチになにしてやがる」とすごんだことで、すっぱりと片が付いた。それも当然だろう、彼女たちは篠塚にだけは嫌われたくないはずなのだから。それ以来、親衛隊のひとたちとわたしは、お互い見なかったふりをするような関係になっている。

それはともかく、そういえば、とわたしは思い出した。篠塚は、

いつも、いつでも、誰よりも早く登校しているんだった。篠塚の朝の早さには勝てるはずもない。そんな篠塚に向かって、わたしは言った。

「これくらい早いと、空気が気持ちいいね。篠塚はいつもどれくらいの時間に来てるの？　わたしもせっかくだから、これからこの時間に来ようかな」

言いながら教室を横切って、わたしは自分の席に向かう。すると、菱川が！？」

と言うなり、篠塚が勢いよくふきだした。

「眠れる森の姫様が、毎日早くからお目覚めをして登校だって？

おいおい、冗談は勘弁してくれよ。今日の早起きはなにかの間違いだろ？」

「……そっちこそ勘弁してよ、もう忘れてってば」

わたしは憮然としながら、自分の机に鞆をかけた。

眠れる森の姫というのは、中等科のときに一時期はやった、わたしのあだ名だ。良い意味では、もちろん、ない。それは中等科2年生のときにあった修学旅行の2日目のこと。わたしは大がつくほどとんでもない寝坊をやらしてしまったのだ。

わたしの記憶にはほとんどないのだが、篠塚いわく、そのときわたしは鼻をつまもうが揺さぶろうが蹴ろうが、これっぽっちも目を覚まそうとしなかったらしい。理由は前日にはしゃぎすぎたせいだと思っただけれど——自分の体力のなさが、つくづく恨めしい——なんとかわたしを起こそうと四苦八苦していた篠塚は朝食を食べ損ねてしまい、それでもなお起きないわたしのせいで、同室のみんな——わたしと同じ班のみんなは、あやうく集合時間に遅れてしまうところだったのだという。それでもなんとか集合時間に間に合った理由は、業を煮やした同室のみんなが、寝ているわたしからパジャマをひっぺがし、むりやり制服に着替えさせて、荷物は鞆にぎゅうぎゅう詰め込んで、そこまでされてもまだ寝ぼけているわたしを引きずるようにして集合場所に連れていってくれたから、らしい。

それでも、そんな自分のどうしようもない体力のなさを自覚してからは、わたしは無理にはしゃいだり、騒いだりすることを控えて、そのあとにあった林間学校でも、文化祭でも、そのほかのありとあらゆる行事でも、誰にも迷惑をかけることはなくなった。そんなふうにせつせつと努力を続けるうちに、ようやくわたしから『眠れる森の姫』という屈辱と後悔に満ちたあだ名は自然に離れていったのだが……かわりに、いつでもとろとろマイペースだということの一部の生徒から「ぼんやりちゃん」というありがたくもない異名をもらうことになってしまった。

それはともかく、そうやってわたしが懸命にがんばって撤廃したあだ名だというのに、その努力を誰よりも近くで見て知っていると、何年もたつてからまた蒸し返してきたりするのだから、篠塚は本当に性格も口も悪い。

篠塚はまだお腹を押さえて、教壇を叩きながらヒィヒィ笑っている。普段は皮肉でクールなキャラクターで通しているくせに、こんな姿を熱烈な篠塚ファンのひとたちが見たらどう思うだろう。いや、いつそ見て幻滅してしまえばいいんだ。そんなことを思いながら、わたしはぶすつとしたまま、席に腰をおろした。頬杖について、教室をみまわす。生徒のいないがらんとした教室は、いつもとは全然違っただけだ。

徐々にのぼっていく太陽のまろやかな金色の光は次第に強さをまして、窓ガラスを通してキラキラと輝いている。舞い上がるホコリすら、その光の中ではくると楽しげに踊っているようだ。整然と並んだ机たちは、小さな傷や落書きだってあるのだろうに、朝日を反射すると美しい茶色の木目の一枚板の集合ように見えた。黒板の縁の銀色も鈍く輝いている。そして窓の外に見える青空は、どこまでも高く透き通っていた。

今日の朝はこんなにも美しい。それなのに。

「……今日の殺人鬼さん、調布だつてね」

教壇に突っ伏していた篠塚が顔を上げるのが、視界の隅にうつっ

た。ここは調布市。調布市の朝。早朝特有のやわらかい太陽が照り輝く、新緑が瑞々しく輝く、美しい調布市の朝。それなのに。

「今日、調布で誰かが……殺されちゃうんだね」

「殺される、と決まっただけじゃないだろ」

篠塚のスレンダーな身体が、机の間を優雅にすり抜けてくる。足音をたてない猫のような仕草でそのままわたしのもとに到達することわりもなく篠塚はわたしの机に腰をおろした。

「まあ、調布が対象になるのは今回が初めてだ。恐怖が一気に身近になって、不安になるのはわかるけどよ」

さつきまでひとをからかってゲラゲラ笑っていた篠塚は、それでも真剣な顔になると、今日もやっぱり完璧な美形だった。坊主にしたからこわかる形のよい小さな頭。絶妙なバランスで配置された美しい目鼻立ち。細長い首と、趣味は筋力トレーニングだと公言するにふさわしい、引き締まって均整のとれた細い身体。初雪のように白い肌の中で、切れ長の瞳が、思慮深い色をうかべる。

「それじゃ、篠塚は殺人鬼さんのことを信じてないの？」

「殺人鬼さんってのは、口コミで広まっているだけの俗称だ。政府の公式名称はあくまで『日本国人口に関する管理調整委員会』の中にある『巡回部隊』だろ。今まで捕まった違反者が、すべて殺されているとは限らない。というより、政府にしてみれば認めるわけにもいかないだろ——公的に殺人を推奨してるなんてさ」

皮肉な口調で美しい唇をゆがめて笑うと、篠塚は肩をすくめた。

篠塚は口は悪くて性格も悪いけれど、頭はとて面白い。勉強ができるのはもちろんだけれど、それだけではない。わたしが自分の世間知らずを恥ずかしく思うくらい、いろいろなことを知っている。そこで、世間知らずで頭が悪いわたしは、篠塚にむかって聞いてみた。「だったら、これまでの違反者はどこにいったの？」

「収容所にて再教育、とは発表されてるけどな。でも、その収容所とやらがどこにあるのかは公表されていないし、捕まった違反者の中で、帰ってきたヤツがいるなんて噂を聞いたこともない。そもそ

も自分が違反者になるのを恐れるあまり、目撃者すら存在しない」

篠塚は真面目な顔で、こう続けた。

「実際のところは俺だって、違反者は殺されてるんだろっと思っぜ。増えすぎた人口を調整する一番簡単な手段は、なにか口実を作って減らせばいい。単純な数式だ。——いいか菱川、今日はなにがあっても、9時以降には家を出るなよ」

本気で心配してくれている篠塚が、わたしは嬉しかった。だから手を伸ばして、机の上に置かれた篠塚の細くて形のよい手を、ぎゅっと握った。

「うん、篠塚も、早く帰ってね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3737ba/>

わたしのパパは殺人鬼さん

2012年1月9日19時56分発行